

『クララの明治日記』に見る日本文化

—「雅楽」を中心として—

曾我芳枝

はじめに

現代社会において、日本の伝統文化としての能や狂言、歌舞伎等に関心のある人々は比較的多いが、雅楽、とりわけ舞楽について理解し興味をもっている人は極めて少ないように思われる。実際、学生を対象に行った舞楽に関するアンケート調査(T大学学生191名、2006年7月調査)では、実に84.8%の学生が「舞楽を観たことがない」と答えている。それは、舞楽が近代になるまでの千数百年余り、寺社等の行事を除いて一般の人々に参観が許可されることなく、主として宮中に於いて受け継がれてきたことと、明治維新以降も学校教育や公の場でほとんど取り上げられることなく現在に至っていることが大きな要因として考えられる。

筆者も同様に長年学校における舞踊教育に携わってきたが、雅楽について充分理解しているとは言えなかった。しかし数年前、舞踊教育の始まりである唱歌遊戯の成立過程について研究していた際、雅楽がその過程に大きく関わっていたことや、舞楽が能や狂言よりも古くから日本にあり現在もなおその伝統美が受け継がれ、人々を荘厳な世界に誘う存在であることに改めて気付かされたのである。以来機会を見つけては全国各地の寺社等の催事に出かけ雅楽鑑賞を重ね、その都度、日本特有の様式美に彩られた舞楽と雅楽との見事な調和に深い感銘をうけたことが舞楽研究のきっかけとなったのである。そして、かつて他の研究の参考文献にした『クララの明治日記』⁽¹⁾の中に、数か所ではあるが舞楽について記述されていることに注目した。

明治初期は西洋の文化と日本の文化が目まぐるしくクロスオーバーした時期であり、雅楽においても一般の人々に開放されるきっかけとなった特筆すべき時期であった。その激動期に弱冠14歳のアメリカ人少女クララ・ホイットニー(1861~1936)が来日し、好奇心に満ちたみずみずしい感性で日本の生活について書き綴った日記が『クララの明治日記』である。そこには当時の日本の生活習慣や文化が、鋭い観察力とあたたかな眼差しで表現されており、その文章力と友好的姿勢に深く感銘したのである。

本稿はこの日記を通して、当時行われていた雅楽をクララがどのように捉えていたか、とりわけ日本独自の伝統文化である舞楽に対してどのような印象をもったかについて考察

『クララの明治日記』に見る日本文化

し、宮内庁書陵部に保管されている宮内庁式部寮雅楽課の公文書である『雅楽録』⁽²⁾や楽家の『芝家日記集』⁽³⁾、『豊原喜秋記』⁽⁴⁾を手がかりに、クララの観た舞楽の演目を明らかにしたいと考えた。また、彼女にとって雅楽をより身近なものとした雅楽課の伶人との関わりについても探っていく。

1. 明治初期の「雅楽」について

ここで「雅楽」について簡単に述べておく。現在、日本で使われている「雅楽」という呼称は平安時代の宮廷・貴族の音楽や舞踊を指しているが、それは中国や朝鮮にも存在し「俗楽」（俗世間で行われる音楽で、三味線・箏曲・俗謡の類）に対する言葉として使用されている。しかし日本の「雅楽」は、飛鳥・奈良・平安時代に古代のアジア大陸から伝来した音楽と舞が日本古来の様式に融合し日本化され、「雅楽」として結実したもので、千数百年以上の歳月を経てわが国の楽人や舞人により今日まで受け継がれてきた歴史をもつものである。また、「舞楽」とは雅楽に舞が伴うものであり、唐楽で舞う左方舞、高麗楽で舞う右方舞、日本古来の舞である国風歌舞があり、舞の姿によって平舞・武舞・走舞・童舞に分けられる。「雅楽」は時代の変遷とともに何度か変革が繰り返されたが、明治維新に至り更なる改革が遂げられたのである。それは丁度クララが来日した時期に当たっている。当時明治政府は天皇の宮中儀式や外国人客接待に「雅楽」は欠くことができないものとして位置づけ、全国各地の楽人たちを東京の雅楽稽古所に集め選抜の上に技術向上を図り、公開演奏を通して多くの人々に「雅楽」を広めようとしたのである。

このように平安時代後期に「楽家」と呼ばれる家々によって一子相伝され「口伝え」によって守られてきた「雅楽」は、明治になって世襲の壁が取り払われ、一般にも門戸が開かれることになり「宮内庁式部寮雅楽課」という新しい組織が作られたのである。そこに従事する楽人たちは伶人と呼ばれ、彼らが行った改革として西洋音楽の伝習や楽譜の選定及び公開演奏会の実施、またパリ万国博覧会に楽器や楽譜・資料等を出品し、「雅楽」を日本の音楽として世界に紹介したことなどが挙げられる⁽⁵⁾。

明治期に来日した外国人の中には、「雅楽」に関する記述を残した者もいたが⁽⁶⁾、クララは上記のような日本の雅楽史上大きな変革期に遭遇し「舞楽」を目の当たりにしており、それをありのままに日記に書きとめた。そこに筆者は重要な意味を見出したのである。

2. 『クララの明治日記』とは

(1) クララの経歴

作者であるクララ・ホイットニーは、1861年にアメリカのニュージャージー州に生まれた。父ウィリアム・コグスウェル・ホイットニーが商法講習所（一橋大学の前身）の教師とし

て赴任するのに伴い、母アンナ、兄ウィリス、妹アデレイドとともに来日した。そして家事の手伝いをする傍ら、当時の上流階級に浸透し始めた英語やピアノ、オルガンを教えた。後に勝海舟の三男梅太郎と結婚し、一男五女をもうけたが1899(明治32)年に実質的な後援者である義父勝海舟が亡くなると、子どもの教育を理由にアメリカに帰国したのである。クララは、日本滞在中に17冊に及ぶ日記を遺しているが、その中で、日記を書き続けた理由を次のように述べている。

喜びや悲しみを伴って一日一日が早足に過ぎ去っていく。私は喜びも悲しみも平静に受け止めようと心掛けています。困難にもかかわらず、私たちは無事に毎日を送っている。新しい日記帳を始める度に、私は最初の日記帳のことを思い出します。母からそれを貰った時の喜びと感激、そしてその純白の頁に字を書くのが勿体なくてしかたがなかったこと。それ以来、日記をつけることが私の第二の天性になってしまい、日記をつけないと気持ちが落ち着かない。(1877年11月19日)

この文章から彼女の日記への強い思いを読み取ることができる。『クララの明治日記』はその抄訳⁽⁷⁾である。その原本はクララの末娘であるヒルダ・ワトキンスから勝海舟の曾孫である一又民子に託されたものである。一又の他に高野フミ、岩原明子、小林ひろみに拠って翻訳されたが、1976(昭和51)年に出版されて以来多くの人々に読まれ、様々な文章の中でこの日記の内容について言及されている。1996年には文庫本として出版された⁽⁸⁾。抄訳された1875(明治8)年から1887(明治20)年までの日記の中には約300名の日本人の名前と、ほぼ同じ数の外国人の名前が書かれており、多くの知識人との交流があったことが窺い知れる。またこの日記には開国後間もない明治初期の風俗が詳しく記述され、明治の礎を築いた要人である勝海舟・福沢諭吉・森有礼らの日常の姿やお雇い外国人たちの姿が生き生きと描写されている。また日本の生活や文化・教育など、当時の世相や事件が感受性豊かなアメリカ人少女の目を通して数多く綴られており、社会的・歴史的意義のあるものとなっている。

(2) クララが見た日本

冒頭、「いよいよ日本に着いた！」で日記は始まっている。その言葉の中には、初めて見る日本という異国への大きな期待と不安が含まれていたに違いない。そして日本の生活に慣れていくに従い、クララは日常生活に於けるいくつかの風俗や習慣について驚きをもって記している。はじめに、漁船に乗っている人々が下帯姿で働いていたことに大きなショックを受けている。しかし一方では「景色のすばらしさは格別で起伏する丘が重なり合い実に鮮やかな緑におおわれていた。『日出ずる国』は本当に美しくてどの眺めも快く(略)」(1875年8月3日)と、日本の景色の素晴らしさに感嘆の声を上げている。また、

『クララの明治日記』に見る日本文化

日本人の接客マナーについて次のように述べ、日本とアメリカの習慣の違いを確認し、それ以降の自分の取るべき態度を明らかにしている。

日本の人々は天性洗練されていて、「エチケットの手引き」みたいな人々である。

人のもてなし方をよく知っていて、人をとても気楽な気分にさせてくれる。だがあの低いお辞儀には閉口だ。さようならを言う時、富田さんは床にひざをつき、畳に額をすりつけていた。だがアメリカの自由な娘がそのように卑屈で屈辱的な習慣をどうして学べるだろう！だから私はアメリカ式に軽く会釈してアメリカの礼儀通り、元気に「サヨナラ」と言って、みんながまだ埃の中にひれ伏しているうちに人力車に乗ってしまった。みるとみんなまだひれ伏したままだったがあまり気持ちのよいものではない。(1875年10月15日)

その他お世辞についても言及している。クララは日本人が礼儀をわきまえていることに感心する一方で、受け入れることのできない習慣については独自の方法で対応し、催事や社会的活動の参加ほか互いの自宅を訪問するなど、日本文化に関わりをもちながら日常生活を大いに楽しんでいたことが窺える。

3. 『クララの明治日記』に見る雅楽に関する記述

次に『クララの明治日記』に記述されている雅楽に関する部分を取り上げる。表1は、日記から文章を抜き出し表にまとめたものである。『クララの明治日記』には1878(明治11)年に初めて雅楽のことが書かれ、1880(明治13)年以降には記述が全く見られなくなる。そこで明治11年から明治12年までの2年間を中心に考察していくことにする。雅楽は通常「管弦」、「舞楽」、「歌物」の3部門に分けられているが、ここでは主として「舞楽」について取り上げていく。

表1 『クララの明治日記』(1878年～1879年)における主に舞楽に関する記述 (原文のまま)

年 月 日	舞楽に関する記述
1878(明治11)年 12月9日火曜(筆者注：10日の間違いと思われる)	(前略)滝村氏は牛込の音楽協会(雅楽稽古所)の開会式に出席するようにとの岩田氏の招待状を持ってきて下さった。それで午後の一時に家の人力車に乗って招魂社に出かけていった。着いてみると建物の周りには天皇の御紋を染めぬいた紫の幕が張り巡らされており、中庭には皇后様の立派な馬車から、安物の人力車にいたるまでありとあらゆる乗物が一杯に並んでいた。 大広間には洋服を着た偉そうにみえる紳士方が大勢おられて、入っていくのが気がひけるようだった。しかし滝村氏が持ってきて下さった招待状を示し、会長の岩田氏の歓迎を受けた。そして美しく着飾った日本人の女性の大勢集まっている部屋に案内された。やわらかい美しい絹の

年 月 日	舞楽に関する記述
I-1	<p>着物をお召しになった中村さんの奥様とお嬢様が進み出て来られて、私たちを席へ案内して下さいました。ドイツ人と思われる外人女性が一人この中におられたが、後でうかがったところ、松野さんという日本人の奥様であった。大変陽気な方でさかんに笑ったりしゃべったりしておられた。この方が中村さんのお嬢さんに私のことをワシントンさんかと聞かれたそうだ。毛皮のコートからそう思われたのであろう。やがて大広間に来るように、との知らせがあり、行ってみると笙、琵琶、和琴、琴、ひちりき、笛、太鼓、羯鼓、鉦鼓、などの演奏が始まっていた。演奏者はみんな洋服姿で椅子に腰かけていたが、建物も、飾りつけも、楽器もすべて日本のものなのに、そぐわない感じであった。最初のは私の知らない曲で、十分味わうことができず残念であった。次の曲は私にはずっと面白かった。それに、さっきは黒い服を着ていた演奏者が、今度はまるで芝居の舞台以外に見たこともないような絢爛豪華な衣装を着けていたのだ。演奏者はみんな兜を被っており、ローマの戦士のような感じであった。ことに髭を生やしている方は、その感じがいっそう強かった。琵琶を弾いている真白の髭のご老人は実に立派にみえた。演奏が始まると華麗な衣装をまとい、頭に兜のような冠のようなものをのせた少年がしずしずと入って来た。そのあとに、同様の服装の少年が三人続いた。いずれも刺繍のある真赤な着物を着て片はだを脱ぎ下から同じく豪華な刺繍のある白と赤の着物がみえていた。また数メートルの長さの裳を引きずっていた。この少年たちは非常にこみいった踊りを実に正確に優雅に踊った。</p> <p>踊り終わって再びしずしずと引きあげた後、^{そと}外の外国の楽隊が『エジンバラから一哩』を演奏し始めた。次いで『アニー・ローリー』その他、スコットランドの歌を沢山演奏した。スコットランドの歌ばかり演奏したのは不思議だが、なかなか上手ではあった。</p>
I-2	<p>その次に十六七歳と思われる少年の剣舞があった。彼はプロケードのトルコ風のズボンを履き、白いベルトを締めていた。頭には白鉢巻をしていたが、額のところに黄色い菊の花束を二つ差していた。手にはきらめく長い槍を持っていた。この槍に、明るい銀色の紋章のついたきれいな小さい吹流しが結びつけてあった。彼は様々な槍の操縦法を見せたが、それは日本人には面白いかもしれないが、私にはただ滑稽でしかなかった。余りにおかしい踊りで、しかもご本人は大真面目なので私は笑いをこらえるのに一苦労だった。</p> <p>これが終わったところで、もう遅くなってきたので帰ろうとしたら、岩田さん他三人の方が駆け寄って来られて、もう少しゆっくりして歌を聞いていって下さいと懇願された。それでもう少し居ることになったところ、歌ではなくご馳走が出てきた。テーブルの周りには二十五人ほどの人が腰かけたが、外国人はサイル先生、松野夫人と私たちだけであった。日本人はみな高位高官の方々ばかりであった。皇后様の叔父上に当たる方もおられたし、海軍大臣他何人かの大臣もおられた。皇后様は昼の間おいでになったが、「お茶にはお残りにならない」とのことであった。お客様の中の二人の方が歌をお作りになって、空腹の演奏者が、お</p>

年 月 日	舞楽に関する記述
	客様の口の中へ消えてゆくご馳走をうらめしげに眺めながらそれを演奏した。
1879(明治12)年 5月2日金曜	(前略)授業をいつもより早く始め、十二時前に終え、お昼にした。それから、牛込(見附内富士見町)にある、宮内省の雅楽稽古所の春の演奏会に招かれていたので、お逸さんと内田さんの奥様と一緒に聞きに出かけて、そこへ二時に着いた。沢山の人がいたが、滝村氏やその他知った方々が入口で迎えて下さった。中は正装の男の人達で一杯でフランスの音楽隊の派手な衣裳が、黒の洋服や袴を明るくしていた。私たちは大きな部屋に通されたが、そこはすでに楽人達がすっかり仕度を整えてすわっていた。まもなくディクソン氏と知らないオランダ人が現れた。
II-1	最初は美しい宮廷服と奇妙な帽子(烏帽子)をつけた四人の男の人による踊りだった。勿論、私達が知っていたのはこれが春の讚美だということだけで、その他の意味はわからなかった。次はやはりアマチュアのバンドが外国音楽をととても上手に演奏した。ただ太鼓の音が大きすぎたが、少くとも衣裳はとてもよかった。次の踊りは陪臚(雅楽の曲名)という素晴らしいものだった。インドの陪臚という寺から発祥したといわれているが、ほんとうのところはわかっていない。ヤマトシロの大変豪華な着物に、染分けの絹糸で紋を刺繍した紗の長いもすそのついた衣裳で、手には長いピカピカ光る槍と盾を持ち、腰には長いカーブした剣をつけていた。長いまがった帽子は騎士の羽根に似ており、厚手のプロケードはよろいのようなようだった。槍には、徳川家の紋を金糸で縫取った空色の旗がつけてあった。動作は全体を通じて優雅で整っており、見事な踊りだった。盾と槍を使った殺陣は、音楽とぴったり合い、次に稲妻のように刀が鞘から抜かれ、最後は美しい動きの素手の戦いだった。こういう種類のものでこれほど素晴らしいものは見たことがないので、どうやってこの踊りを描写すればよいかわからない。美しい色とりどり、踊り手のゆっくりと優雅な動き、飾りのついた槍や刀のロマンチックさ、それでいて悲し気ともいえそうな荘重な顔付きが詩心のあるものには何とも言えない魅力だった。勿論、ヨーロッパ音楽の方は決して一流とは言えない代物で、ただ音さえ大きければ良い、といわんばかりの騒音に、私は恥ずかしくなってしまった。
II-2	その次は、もの凄い顔の面をつけた青年の踊りで、他に良い名がなかったので、「熊踊り」と私達は呼んだ。この黒い面はそりかえり、銀色の目はとび出し、同じ銀の歯と牙がむき出し、しわの寄った黒い額に毛が少しばかりはえているのだった。おそろしい顔とは対照的に、着ているものは、ウェーブしたやわらかい房のついた豪華なプロケードに、私も欲しいような透し細工の銀のベルトをしていた。この怪物はまた手に銀の棒を持っていたが、その手は黒い顔とは対照的にきしゃで小さく黄色かった。この踊りはどちらかという滑稽なのだが、観客のほうは日本人特有の荘重さをくずさなかった。「野獣」は同じ動作を何度もくり返すので退屈だった。かん高いひちりきや笛の音に、時々笙の美しい音が入る音楽に合わせて、歯をむき出して笑ったり、一定の歩調で歩きまわったり、足を踏み鳴らしたり、身軽に飛びあがったりするもので、
II-3	

年 月 日	舞楽に関する記述
II-4	<p>「野獸」が出ていった時はほっとした。最後の踊りはすてきだった。戸がパツとあくと、古代の宮廷衣裳をつけた背の高い男の人が堂々として入ってきた。トルコ服のようなズボンは緑地に白で唐草模様が浮き出し、真赤な上着に、白い絹のもすそを後に長くひきずっていた。頭には赤いつつじの枝をつけた冠をかぶり、足には奇妙な形のうるし塗りの巨大な靴をはいていた。その後、同じようにゆっくりとした足どりで三人入ってきて、最初の人隣についたが、もすそを整えるのに長い時間かかっていた。あきらかにすばらしいものらしい。それから冠に白い花をつけた豪華な衣裳の六人が続いて出てきた。幅広のズボンは濃い紫で、上着は濃い緑に、薄紫と白で素晴らしい模様がついていた。袖はたいへん大きくて、和琴、ひちりき、笛を持っていた。「赤帽」の反対側にすわると、舞踊音楽を歌いだした。真赤な四人は音楽にあわせて歩きまわったり、二人二人になってひざまずいたり、長い袖をふったりする他はあまり動作をしなかった。彼等は若くなく、まるで悲しみに打ちひしがれているかのように、悲しげな奇妙な顔付きをしていた。それから、ゆっくりとすべるような足取りで、一人一人堂々と退場していった。観客はすっかり魅せられて、最後の長いもすそが舞台の後に消え、最後の冠が天皇陛下の旗の下でお辞儀をするまで帰らず、じっと坐って見ていた。</p> <p>幕間の時間に、私達は偶然、楽屋裏をのぞいて、貴公子や武將達が衣服や帯をつけてもらったり、着付けのすんだヒーローが他の人を待つ間、もすそを後ろにからげ、前にちょっとかがんだ姿勢でベランダを歩いているのをかいま見た。終わった後、二つの楽屋は大騒ぎだった。白い薄い着物を一枚だけ着た人達は恐ろしいほどやせてみえた。お逸は借物の孔雀の羽をむしられたからすを思い出した。衣裳などをよくみた後、岩田(通徳、掌典補)氏とその友人達にお礼をのべ、すっかり疲れて帰った。内田さんの奥様はとても喜んで帰られた。</p>

(『クララの明治日記』より作成、下線が舞楽の部分)

この表からは雅楽稽古所での舞楽の様子が音楽や衣装、振り付けなど多面的に記されており、クララの雅楽に対する関心の深さと感受性の豊かさを読み取ることができる。また1879年5月2日の演奏会では伶人たちによって舞楽と西洋音楽が交互に演奏されており、クララの其々の感想が興味深い。

4. 『雅楽録』・『芝家日記集』・『豊原喜秋記』に見る演目の比較

クララの観た雅楽稽古所の舞楽について、他の資料である『雅楽録』・『芝家日記集』・『豊原喜秋記』をもとに比較検討した。その結果、研究開始時には「陪臚」以外は未確定であった稽古所での初公開演奏の演目等が明らかになった。それを表2に示し、その特徴と解説を付記した。

『クララの明治日記』に見る日本文化

これら3点の資料によって、1878年12月10日における雅楽稽古所日課開業式の舞楽の演目は「万歳楽」と「貴徳」であり、翌1879年5月2日の「春の楽舞大演習」の演目は、「打球楽」、「陪臚」、「落蹲」、「奏楽」であったことが判明した。

表2 クララが観た舞楽について他の文献による比較・対照

	『雅楽録』	『芝家日記集』	『豊原喜秋記』	舞楽とその解説 『雅楽事典』
I-1	「万歳楽」	「万歳楽」	「万歳楽」	<p>【万歳楽】左方舞。平舞。舞人四人。左方襲装束。片肩袒。烏甲。隋の煬帝、唐の武太后、漢の武帝などが、この曲を作らせたという説があり、「賢王萬歳」と囃ったので、その声を楽に、姿を舞にしたとも伝えられる。舞人は鳳凰をかたどったといわれる烏甲をかぶり、太刀はつけず、何枚もの衣装を重ねる襲装束をつけて舞う。p.194</p>
I-2	「貴徳」	「貴徳」	「貴徳」	<p>【貴徳】右方舞。走舞。舞人一人。別装束。面、牟子、別甲、太刀。両手に鉦を持つ。一名を「貴徳侯」といい、神爵年中(紀元前61~51) 補に匈奴の日逐王が漢に降り、貴徳侯に封ぜられた故事にちなんでいるという。p.155</p>
II-1	「打球楽」	「打球楽」	「打球楽」	<p>【打球楽】左方舞。舞容は平舞に近い。舞人四人。別装束(錦緑袖透襦)、抹額冠、巻纓、綏、右手に毬杖を持つ。古くは、騎射、競馬、相撲などのときに舞われた舞楽。四人で唐の武官の装束で舞う。右手に持つ毬杖は金色に五色で彩色されている。p.181</p>
II-2	「陪臚」	「陪臚」	「陪臚」	<p>【陪臚】右方舞。武舞。舞人四人。別装束(錦緑袖透襦)、抹額冠、巻纓、綏、太刀。右手に鉦、左手に楯を持つ。東大寺の大仏開眼供養会でも奉納されたとされる舞。そのときの導師となった天竺の僧菩提僊那と林邑の僧仏哲が伝えた林邑八楽の一つで、唐楽に入るが、舞は右方に属する。武人の出陣を思わせる勇壮な舞である。p.188</p>
II-3	「落蹲」	「落蹲」	「落蹲」	<p>【落蹲】右方舞。走舞。舞人一人。別装束。面、牟子。銀色の桴。(舞人二人を「納曾利」という)</p>

	『雅楽録』	『芝家日記集』	『豊原喜秋記』	舞楽とその解説 『雅楽事典』
				龍が楽しげに遊ぶ姿の舞といわれる。龍の面をつけ銀の桴をもって舞う。昔は勝負の時に右方の勝者を祝って奏したことが多かったという。p.196
II-4	記述無し	記述無し	記述無し	

注) 解説は、小野亮哉監修『雅楽事典』（音楽の友社、1988）から作成した。

5. クララの舞楽鑑賞の記述から

前項3と4で示したようにクララが観た舞楽の題名が解明されたが、クララはこれらの演目に対し果たしてどのような印象を受け感想をもったか、ここでは日本人との受け止め方の相違点及び共通点について推察を交えながら述べていきたい。加えて筆者が各地で撮影した舞楽のVTR⁽⁹⁾も参照しながら考察していく。

I-1. 「万歳楽」について

舞踊については「込み入った踊りを実に正確に優雅に踊った」とあるが、「優雅」という表現から、「正確さ」とは単に音と踊りが合っていたということよりも、むしろ音楽と舞踊の調和の美しさを感じ取ったものではないかと思われる。また「しずしず入ってきた」という感覚表現は非常に興



「万歳楽」（熱田神宮 2010.5.1）

味深く、アメリカ人でありながらその静的な所作から日本の伝統的な美しさや奥ゆかしさに感銘していたことが窺われ、美に対する日本人との感覚に近いものが読み取れる。また武具や装束の描写が的確であり、舞楽「万歳楽」の全容が詳しく描かれている。

I-2. 「貴徳」について

『舞楽事典』や筆者のVTR映像では極めて特異なお面をつけ龍甲と呼ばれる甲をかぶっているが、意外にもクララはそのことについては触れていない。しかし「槍に、明るい銀色の紋章のついた小さな吹き流しがついている」とあり、「二巴の紋章がついた金欄の鱗がついており、鉾の様々な操作法を見せている」と、武具には大きな関心を寄せている。この舞の所作についてクララは「日本人には面白いかもしれないが」と、前置きをして、自分にとってはただ滑稽でしかないにも拘わらず大真面目に操作しているので笑いをこらえるのに苦労したと、日本人との感覚の違いを述べている。これは剣舞のような動的

『クララの明治日記』に見る日本文化

な舞と振り付けは西洋人には受け入れられない特有の大仰な所作があり、しかも舞楽の歴史や様式などの十分な知識のない少女にとっては、極めて難解なものであったのではないかと推察される。

II-1. 「打球楽」について

「打球楽」は元来、馬に乗って木の杖(毬杖)で毬をすくい奪い合う遊戯を題材にした舞楽で勇壮な舞であったようだが、現在ではとてもゆったりとした優雅な振り付けがなされている。クララはこの舞台を観て「春の賛美をあらわしている」と感じ取っていたようだが、この音楽や動きから春の響きや情景をイメージしても不思議ではなく感性の豊かさが感じ取れる。ここでも他の演目と同じように、服装や帽子、武具などに注目し、高い意識で舞楽を鑑賞していることが分かる。



「打球楽」(春日大社 2009.5.5)

II-2. 「陪臚」

日記にはこの演目のみ題名を記していることから、雅楽関係者から解説を受けながら鑑賞していることが伺える。体の前後に付けた厚手のプロケードは補襦りょうとうのことを指しており、鎧のようだと記述している。この舞は戦の出陣の際、戦勝を祈願して舞われるもので、クララの鋭い観察力が窺える。また装束や舞具の色彩やデザインについての詳細な説明に加え、その踊りは「たとえようもなく美しい」と記し、壮麗で優雅なさまを絶賛している。また記述は演者の顔の表情にも及び、荘重な顔付きが詩心のある者を魅了すると述べている。これらのことからクララがいかに雅楽や舞楽に関心を持ち理解を深めていたかが窺い知れる。美に対する感性や憧憬に国境はないという事象といえよう。

II-3. 「落蹲」

お面を見て、「もの凄い顔の面」と表現し「熊踊り」と名付けているほどアメリカの少女には奇異に映ったのだろう。しかし対照的に身に付けているものには大いに興味をそそられたようだ。踊りは滑稽であり、何度もくり返すので退屈だったと感想を記し、終わった時はほっとしたと述べている。しかし、クララが滑稽と感じたにも拘わらず、観客が最後まで日本人特有の荘重さをくずさなかったことに驚き、自分との感性の違いについて述べている。また楽器にも言及し、ひちりきや笛の甲高い音に閉口する一方で、天上からの響きにも例えられる崇高な笙の音色を称賛している。

II-4. 「奏楽」

「最後の踊りはすてきだった」とあるが、3点の資料によると舞楽名は書かれていない。舞が無く簡単な動きを伴った奏楽のみであることを考えると、「長慶子」ではないかと思われる。うるし塗りの靴で舞うことはあり得ないとする。ここでの雅楽に対する記述は最も長く、その描写は詳細で多岐にわたり、クララの旺盛な好奇心と観察力が窺い知れるものとなっている。

以上、クララの舞楽公演に関する感想から、一人舞の速いテンポの「走り舞」については滑稽な踊りとして捉えており、舞楽特有の様式や所作が充分理解されていないことがわかる。しかし「平舞」については、緩やかに奏でられる音楽と優雅な舞との融合に心から共鳴している様子が窺われ、クララの豊かな感性及び知性が推察される記述となっている。クララは「平舞」に大いに共感し感動していたようだ。

6. クララ・ホイットニーと伶人との関わり

最後にクララと雅楽課の伶人がどのような経緯で関わりを持つようになったか、そしてその後、クララは雅楽をどのように捉えていたかについて述べていく。

1878(明治11)年7月29日の日記に、そのきっかけとなった様子が書かれている。

(前略) 今朝私達がまだ寝ているうちに滝村さんがみえて、なんと午後の三時までおられた。彼はパリの博覧会に送るために古典音楽について長い論文をお書きになった。それを私に直してほしいというのである。わたしは一日中その仕事にかけた。日本の音楽についていろんなことを学んだ。(後略)(1878年7月29日)

滝村という人物は滝村小太郎(鶴雄)といい、徳川家の相続者の守り役(家令)という立場にあった。日本音楽の学校(式部寮の雅楽稽古所)の責任者である岩田通徳からパリ万国博覧会(1878年)のための音楽論文の翻訳を頼まれ、それをクララに見てもらったことから彼女と伶人たちとの関わりができたようである。式部寮は、この機会に雅楽を世界に広報する為に楽器や楽譜・絵図等を出品していたことも『雅楽録』から明らかになっている。同年11月11日にクララたちは日本音楽の学校を訪問し、日本の伝統音楽を聴いている。

(前略) 午後日本音楽の学校を訪問するという幸運に恵まれた。それは湯島の招魂社の近くにある。滝村氏が迎えに来て下さって、二時に大きな日本建築の前に着いた。滝村氏が校主に取次ぎを頼むと、私たちは中に招じ入れられ、岩田氏に紹介された。この方が主任音楽家であって、音楽の表示法に関する著書を滝村氏が翻訳しておられるのだ。彼は私が手伝ったことに対してお礼を言われ、二つの大きなガラス戸を開けて、たるきが露出しており、床にカーペットを敷いた大きな広間に私たちを案内された。ここには二十五人から三十人の日本人の男性が集まっていた。(中略)あらゆる楽

『クララの明治日記』に見る日本文化

器を持ち出して来られ、一人一人がご自分の得意の御自分の楽器を弾いて聞かせて下さった。一人は和琴、一人は笙、それから琵琶、笛、太鼓、ひちりき、等々。私は数々の新しいことを学び、新しい曲を聞いた。一つの曲ははじめ和琴と笛で演奏され、ついで笛とひちりき、笙、羯鼓でもって演奏された。次に声楽と笛、ひちりき、琵琶、和琴、琴その他の一大合奏があった。(1878年11月11日)

その後、12月10日には日本音楽の学校の開業式(牛込雅楽稽古所開業式)に招かれ、舞楽などを観ている。この開業式は、はじめて一般の人々も観ることができるようになったもので、千人余りの人々が集まったということである⁽¹⁰⁾。

翌1879(明治12)年1月25日には、クララ宅で音楽会を催している。そこでは、日本の音楽を聴くだけでなく、クララがオルガンを弾いて合唱する場面もあった。

一日中準備をしていた音楽会がすばらしくうまくいった。ご招待してあった滝村氏と岩田氏がみえて、五六ヶ所から別々に届けられた楽器を家の客間に用意された。やがてドラが鳴って他の六人の音楽家がみえた。皆さん立派な和服姿で礼儀正しく、紳士的であった。獅子のような顔に白髪を髭を生やした岩田(通徳)氏、琴を弾かれる教授のような感じの紳士、大きな声に派手な身振りの滑稽な小柄の東儀氏、前に私の注目を引いたすばらしいテノールの声の持ち主である柴田(芝か)氏、みなさんが上と呼んでおられる笛の名人の丈の高い立派な顔の方などがみえていた。この他に^{うえ}お名前を存じ上げない方が二三人みえた。(中略)最初の一曲は単調で演奏され、次には声楽を加えて演奏された。(中略)次に私に一曲弾くようにと所望されたので、私は大勢の本職の音楽家たちの前で弾くのは胸がドキドキしたが一曲弾き、皆さんが手や足で拍子を取られた。(中略)柴田氏はきれいなテノールで、磨く値打ちがある。彼はオルガンの横に立って歌の先導をしたり、一緒に笛を吹いたりなされた。あとで音楽について彼といろいろ楽しく話し合った。和琴の本を見せて下さって、漢字の読み方を教えて下さった。(後略)(1879年1月25日)

また、4月10日にも伶人たちを招き音楽会を催している。そこでは招待した外国人の雅楽演奏に対する無理解とマナーにクララ自身が恥じ入っている様子が記されている。

(前略)じきに演奏がはじまり、むせぶような調べが流れた。隠居所でその音を耳にした安房守は、昔日の將軍の御威光を思い出されたことだろう。だがアングロ・サクソン人にはそのような思い出があろうはずもなく、妙なる調べは無意味な不協和音となって、太って丸い顔には笑いさえ浮かんでいた。ああ、日の出る国のミューズの神よ、無知な外国人を許し給え。(後略)(1879年4月10日)

この時点でクララは既に雅楽特有の不協和音の妙を感じ取っていることが伺える。それほど彼女は雅楽を理解し親しみを感じていたことが言えよう。そして、5月2日には牛

込雅楽稽古所春の樂舞大演習会に出席し雅楽の演奏や舞樂を観ている。また7月2日の日記には、「昨日ミカドの音楽家であり、戦舞を大変美しく舞った柴田(一等伶人、^{しばふじつね}芝葛鎮か)氏が、音楽のことで相談にいらっしまった。」(1879年7月2日)とあり、伶人の一人がグランド将軍⁽¹¹⁾のレセプションで演奏する曲について相談に来ていたのである。

このように日記には雅楽に関する記述が随所に見られ、その関心の深さと謙虚に学ぼうとする姿勢、そして豊かな感性が読み取れる。伶人たちとの関わりにおいてはクララが新しい文化を吸収しようとする一方で、伶人たちにとって古楽に洋楽を取り込もうとする変革期におけるクララとの合奏は、洋楽の知識や理解など大きな刺激を得る極めて意義深い交流の機会であったことが推察される。クララと伶人たちは互いの国の音楽に大変興味を持っていたと言えるだろう。

7. まとめ

本稿は『クララの明治日記』をもとに日本の伝統文化の中でも難解な雅楽、とりわけ舞樂に対して価値観や信念の異なる外国人がどのように受けとめ理解していたかを比較検討したものである。その結果1875(明治8)年に来日したアメリカの少女が日本古来の舞樂に向き合い、西洋音楽とは全く異質の音や舞踊の世界を旺盛な好奇心と情熱をもって積極的に理解しようとしていた姿が認められた。その姿勢は日記の随所に見受けられ、興味の対象は音楽をはじめ、舞踊、所作、装束、武具、演奏、演者、楽器など多岐にわたっており、優れた洞察力と詳細な記述は異文化である雅楽に対するクララの深い関心と高い意識を物語っていると見えよう。更には外国人でありながら、舞樂特有の様式美や醸し出される荘厳、神秘、瞑想的といった言葉に修飾される世界を、日本人的感觉に近いところで捉えていたのではないかと推察される。

また、同時に宮内庁式部寮雅楽課の公文書である『雅楽録』と楽家の日記等を手がかりに、明治初期に行われていたクララの観た舞樂の演目を明らかにした。そして1878年、雅楽稽古所日課開業式で初めて観た演目は「万歳楽」と「貴徳」であり、翌1879年に行われた「春の樂舞大演習」での演目は、「打球楽」、「陪臚」、「落蹲」、「奏楽」であったことが明らかになった。そして1878年の演奏会は、雅楽課が設置されて以来、記念すべき初めての公開演奏会であり、伶人たちによって西洋音楽と舞樂が交互に演奏されていたことも分かった。このように『雅楽録』及び『クララの明治日記』を検討することにより、明治初期における雅楽の実態が解明され加えて、雅楽課によって東西交流の推進を図り、日本の伝統文化と共に西洋の文化を積極的に広めようとしていたことも窺い知ることができた。また、1878年のパリ万国博覧会に楽器や楽譜・絵図等を出品し、世界に向けて日本の伝統文化を意欲的に発信していたことも知ることもとなった。

『クララの明治日記』に見る日本文化

千数百年の時空を越えて伝承されてきた雅楽。その楽の音に合わせ荘厳で格調高く舞う舞楽、それは海外からの異文化と在来の古楽が出会ったドラマでもあり、能や歌舞伎よりも歴史上はるかに古く貴い日本の伝統文化の世界である。そして雅楽の大きな改革があった明治の一時期、偶然にも雅楽の大変革の場に立ち会い、その海外伝播に一役を担っていたのがアメリカ人少女、クララ・ホイットニーであった。

注

- (1) クララ・ホイットニー著・一又民子訳『クララの明治日記』上・下(講談社、1976)。
- (2) 『雅楽録』は宮内庁書陵部に保管されている。2001(平成13)年3月までは原則として公開されていなかった。
- (3) 芝家は奈良方の楽人の家名で笛と左舞を業とした。『芝家日記集』は1654(承応3)年～1918(大正7)年まで書かれた日記で全176冊ある。天理大学附属図書館蔵。
- (4) 豊原喜秋(1848～1920)は笙を業とする京方楽人である。『豊原喜秋記』(全六冊)上野学園日本音楽研究所に複写蔵、原本は豊原家蔵。
- (5) 近代雅楽制度の改革については塚原康子著『明治国家と雅楽：伝統の近代化／国楽の創成』(有志舎、2009)に詳しい。
- (6) 1863年日瑞修好通商条約締結のため来日したスイス時計業組合長が見聞した記録であるエメエ・アンペール著・茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』(講談社学術文庫、2004)や維新期の4年間を日本で過ごした英国外交官の記録であるA・B ミッドフォード著・長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』(講談社学術文庫、1998)、1889年から1894年までを記した記録であるメアリー・フレイザー著・ヒュー・コータッツィー編・横山俊夫訳『英国公使夫人の見た明治日本』(淡交社、1988)等に舞楽の記述がある。
- (7) 本来ならば原文に当たり考察すべきであるが、もとの日記は出版されておらず、翻訳で十分意図が伝わっていると思われるため翻訳本を用いた。しかし、本稿p.9にあるように「しずしず」などの言葉使いは原文に当たる必要を感じた。
- (8) C・ホイットニー著・一又民子他訳『勝海舟の嫁クララの明治日記』上・下(中央公論社、1996)。
- (9) 実際に筆者自身が生で舞楽を観る必要を感じ、各地の舞楽奉納をVTRに収めた。その成果を2009年12月10日に比較文化研究所主催ティーレクチャーにて「時空を越えた身体文化—各地の舞楽を訪ねて—」というテーマで発表した。
- (10) 『豊原喜秋記』に「本日ニ限り貴賤男女ヲ論セス来観ヲ許ス(中略)右来観許サレタル故千名余ノ参拝ナリ實ニ盛大ニテアリタリ」(1878年12月10日)と記されている。
- (11) 1869年から1877年まで第18代米国大統領。この時グラント将軍は任期を終えて世界周遊の途中であった。

* 『クララの明治日記』の引用は、煩を避けるため本文中に日付を記した。

[現代教養学部教授(健康・運動科学) 2006～08年度個人研究員]